

第42回北方四島交流教育者会議訪問事業報告

北方領土を訪ねて

～ 国後島 ～

2011年7月28日～8月1日

黒部市立鷹施中学校 村田博史

黒部市立鷹施中学校の村田と申します。

わたし自身、以前に黒部市の高志野中学校でのべ11年間勤めさせていただきました。特に、中学校での総合的な学習の時間での「北方領土問題」の学習や地区にある「漁業資料館」の立ち上げに微力ながら係らせていただいた関係で、今回の北方領土訪問団に加わらせていただいたのかなと、感謝申し上げます。現在、富山県「北方領土問題」教育者会議のメンバーとして、教育現場における「北方領土問題」の正しい理解とその普及と発展に動いているところであります。ぜひ、未来にも国の主権に係わるこの問題をより広く深く国民的レベルの活動につながって欲しいと思います。

訪問事業の主な日程

7月28日(木) 結団式、納沙布岬、北方館視察、事前研修会

7月29日(金) 根室港出港、国後島上陸、ロシア語講座、中島岬、ローソク岩視察〔友好の家泊〕

7月30日(土) 視察・訪問(中等学校、保育幼稚園、材木岩、博物館、図書館、消防署等)、ホームビジット〔友好の家泊〕

7月31日(日) 視察・訪問(气象台、港、取水施設、空港、日本人墓地等)、教育関係者、意見交換会、夕食交流会、住民との交流会〔友好の家泊〕

8月1日(月) 根室港帰港

まず最初に訪問日程を揚げさせていただきます。

今回の訪問日程は、7月28日に根室での事前研修会、7月29日から8月1日まで国後島でありました。

北方領土



北方領土を地図で確認しますと、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は本当に北海道と目と鼻の間であることを感じます。

第2次世界大戦終戦時、約3000世帯、約17000人の日本人が住んでいたといわれ、今は同数のロシア人が暮らしています。この地で日本人が築きあげた歴史を不法占拠によって、ほんのわずかの期間に消されたということになります。

戦前に北方四島に渡った方は、富山県が1452人で、北海道に次いで全国2番目。全体の8%にもなります。



28日、根室市の納沙布岬にある「望郷の家 北方館」を訪問し、事前に北方領土の学習をしました。清水館長の丁寧な説明がありました。

案内されている間、この日の、早朝、ロシア政府から住宅や港湾施設などの工事を請け負うサハリン州などで活動する建設会社が、新たに中国人労働者を雇用し、27日午前、9人の労働者が、国後島・古釜布に船で到着したというニュースが気になっていました。



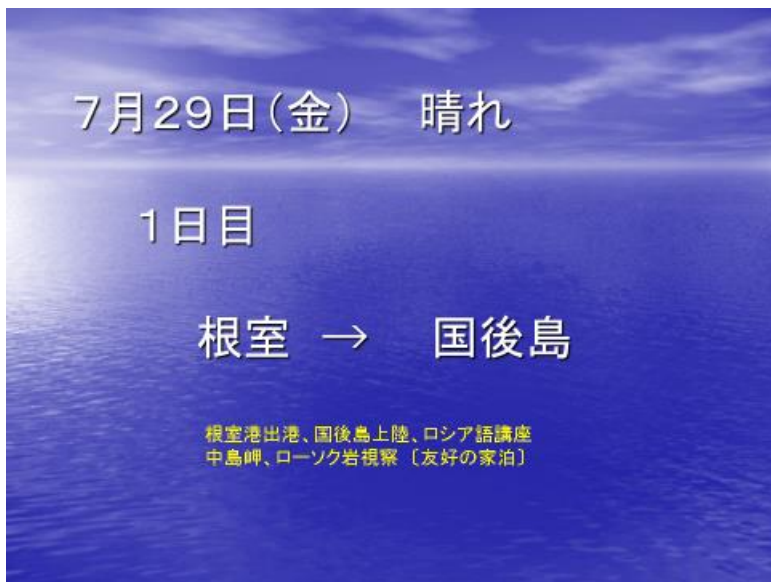
納沙布岬にある「四島のかけ橋」。北方領土の『四島』を表現した4つのブロックがお互いに連なって大きな架け橋となり、領土返還を祈るゲート型のモニュメントである。



7月28日 根室。東の端 納沙布岬。全国民に理解を呼びかけよう 北方領土問題。



納沙布岬から、最も近い貝殻島は、3.7 kmと肉眼でも確認できる近さ。漁船が通り過ぎていく。時々、ロシア船籍のものもあり、船員が飲み物を得るため上陸してくることもあるという。領土感覚が日本人とずれている。入漁料としてサケ・マス（約25億円）、コンブ（約1億円）などをとるために年間相当な金額をロシア側に支払うという現実がある。



いよいよ北方領土の一つ国後島訪問。納沙布岬から37.4 km。私たち一行が乗船するロサルゴサ号。根室港（本町岸壁）から国後島古釜布（ふるさっぷ）港へ。約4時間の船旅である。この船は、その後水晶島へ向かう予定という。北方領土への上陸は、手続きは古釜布で行う。



根室港に停泊中の根室海上保安部 巡視船「さろま」と新しくなった巡視艇「きたぐも」。
厳しい国境警備にあたるのでしよう。感謝いたします。



国後島近し。お昼過ぎ、国後島の羅臼山が左手に見えました。
太平洋側の羅臼崎沖で。中間地点北緯N 43° 28`、東経145° 46`をすぎていたので、あわてて日本時間より2時間すすめる。
国後島は北海道・野付半島の北東16キロに浮かぶ日本固有の島。長さ122キロ、面積1498平方キロ（沖縄本島の約1.2倍）で、島の西側からは知床連山が美しい島。



古釜布港（ふるかまっぶ 露名：ユジノクリリスク）を望む。沖合から見た古釜布)市街。半島の高台に市街中心部がある（千島列島～択捉、国後はオホーツク海プレートの境界近くなので地震多発地帯だが、過去の地震の後に高台に街を移したらしい）。



ロシアの漁船

ロシアの漁船。かなり痛みが激しいように見える。
世界有数の漁場とされる。北方領土周辺海域。
終戦当時7364人の日本人が住んでいたが今、現在島に居るのは約7000人のロシア人だ。



小型船に乗り換え

港の沖合に停泊して、ロシアの船（友好丸）を経由してはしけに移乗し、2回に分かれて上陸した。
（港湾の工事中であり、少々大型船が湾内に入って、岸壁に接岸できる水深が十分とれているか未確認なためであるという。）



友好の家

日本人とロシア人の友好の家（通称：友好の家）。
1999年10月日本国民の友情の印として、日本政府の援助で建てられた。
民族衣装を身に着けたロシア人女性がパンと塩で歓迎してくれます。ロシアでは「パンと塩で迎える」のは客人を最大級に歓迎することを意味しています。ロシア人にとってパンはとても大切なもの。客を迎えるときに、パンにひとつまみの塩を添えて歓迎する習慣がある。



17時半頃（日本時間15時半）の友好の家。



8畳ぐらいの部屋に2段ベッドが4セット。8人部屋。青少年の家の感じ



古釜布港から約100m舗装してあった。一行の到着3日前で、できあがってほやほやということであった。初日にアスファルト舗装工事をしていた場所の近くであるが、わずか数日のうちに、さらに先までアスファルト舗装が進む。メドベージェフ大統領が昨年の訪問時に舗装道路を造る宣言をした結果か。ロシア政府は2007～2015年に行う「クリル諸島社会経済発展計画」で、900億円を超えるとされる巨額の資金を投入したが、そのインフラ整備の一環である。インフラ整備は予想外に急ピッチで進められようとしている。



しかし、島の生活道路は、ほとんど舗装されていない。路肩を歩いていると、土煙が舞い、40年以上前の我が家近くを砂埃をあげてはしっていた車を連想してしまう。



左上が友好の家から見た7年前の写真。下が現在の写真。よく見ると7年前は、道路の路肩には雑草が茂っていたが、現在は道路は整備されつつあるということがはっきりわかります。また、電柱の数も増えていることも確認できます。



友好の家から100mもない近い距離にある。向こうの建物は、南クリル地区行政府が入っている建物で白と青に塗り替えられ、見栄えがよくなった。右の方にレーニン像があった。

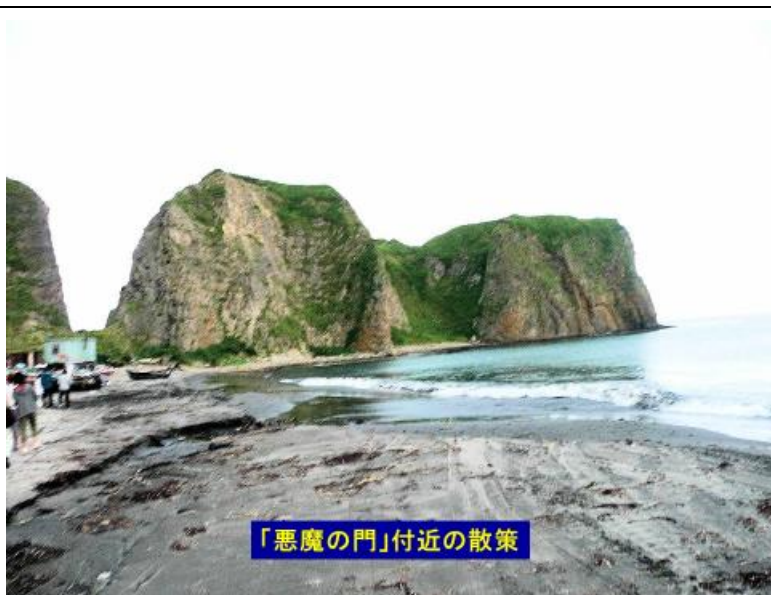


友好の家の目の前にできたレストラン「アマデウス」。
この規模のレストランは他にないらしく、通常は食事は全てここで取った。メニューは、いつも少し物足りない。味もそっけない。レストラン「アマデウス」の2階は百貨店になっているようである。



中島岬へ向かうRV車のキャラバン隊

砂けむりをあげて、中島岬へ疾走する日本のRV車のキャラバン。車はトヨタ、ニッサン、三菱など日本製四輪駆動中古車がほとんど。右ハンドルで右側通行。信号はない。すべてディーゼル車であり、スタンドも島には見あたらない。港の施設で調達してくるらしい。



「悪魔の門」付近の散策

左隅の岩でVに切れた箇所が「悪魔の門」。



砂浜に漁民の船と小屋、そしてなぜか装甲車があった。
訪問時間が20時頃（日本時間18時頃）と遅かったのか、漁師の姿はなかった。



古釜布から10分程車で走った近布内（チカップナイ）にあるローソク岩（「悪魔の指」）の風景。ここは、観光の名所であるようだ。

7月30日（土） くもり

2日目

国 後 島

視察・訪問（中等学校、保育幼稚園、材木岩、博物館、図書館、消防署等）、ホームビジット【友好の家泊】



古釜布中等学校訪問

島の教育制度は、就学年齢は7歳からで、小学校、中学校、高校を一貫した11年制です。9年間が義務教育、修了試験有り。11年制を終える卒業試験は、教師で協議して決める。北方領土には大学がないため、現在では大陸などの大学に80%以上が進学する。9月1日が始業式で、5月末日が終業式。3ヶ月の夏休みがある。訪問時は、勿論休み中で土曜日。生徒も教師も見あたらなかった。



クリル発展計画で、副校長の話によると、予算が付いたので、先月床と天井は新しくしたとのこと。机と椅子も入れ替える予定であるとのこと。色は担当教師の好みであるので、教室ごといろはまちまち。最近、法律が改正されたとかで、随時、机は入れ替えているようだが、それでも、工事の済んだ教室でも、花柄のロッカーや、木目の壁やら、いろいろあった。教室前方上部にある掲示物の算数の演算記号は、かけ算、割り算の場合、日本と違っている。教科書(3年生?)は、日本のものより文字は小さく、活字が多いと感じた。



左上、最近新しくなったランチルーム。厨房は旧式で、お粗末であったが、もうすぐ最新の調理具に入れ替えるという。



狭い。体育館というより多目的ホール。約10m×20m程度。



消火装置。数カ所設置。
これで十分なのか、考えてしま
う。



校地内にある倉庫の壁。落書きは
万国共通のようであるが……。



ペローチカ保育幼稚園



ロシアの民族性豊かな地図。



家電製品は、テレビ(ビクター製)、ラジオ(ソニー製)であった。遊具、玩具などは、いろいろある。2歳から7歳まで。8:00から18:30まで。希望制3食付きで対応し、栄養士がいる。保育料は、月2650ルーブル(日本円7000円程度)で2割負担で、給食費がおおかたを占める。共働きの家庭の子どもには3食の給食付きで、専属の栄養士が配属されている。ちなみに教師の給与は、平均で、保育師7410ルーブル、教師1万497ルーブルという。(1ルーブル=約3円)



片道45分、海岸線の砂利道をひたすら歩いてたどりついた。海岸にそびえたつ見事な材木岩。大規模な柱状節理が見られ、観光の名所なのかな。



アパート内にある博物館。在展示室は6つあり、公開非公開を含めて約6万点余り資料を収蔵している。郷土博物館と言っても全く普通の古いアパートのような感じで、展示室には国後島の植物の標本や動物の剥製、岩石の標本、民族資料などが展示されています。建物自体が古く薄暗く、日本の整然とした美しい博物館とは程遠いイメージ。維持管理費が不足しているらしく、標本・資料は傷みが目立つ。資料のデータはかなり古い。



壁には、ビザなし20周年という紙が掲示してあった。1991年以来、館長は2度日本を訪れたことがあり、言葉が通じないながらもお互いに新しい友情をはぐくむことができたことや、日本にお世話になった人があり、東日本大震災のことを大変心配していた。館長は、館内を明快に詳しく説明してくれた。択捉、国後は、暖流の影響があって、北海道との生態系の間接域に当たると説明していた。しかし、根室では国後、択捉は、植生でも生態系でも北海道との一貫性があり、両者の間接域はウルップ島(得撫島)であると説明と対照的だった。私たち一行のコウモリ観測隊が同行していたが、国後島のコウモリが北海道にも渡っているか調査していた。



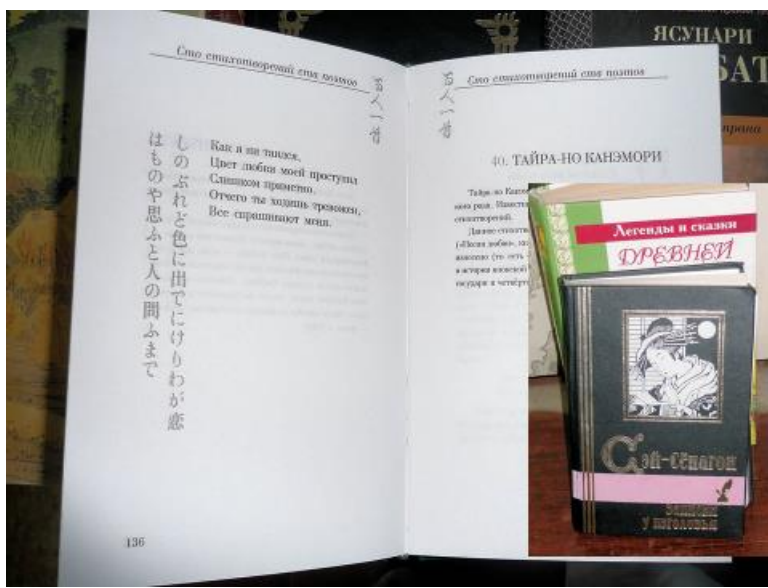
近代史の展示室は、第二次大戦時に用いられた武器類や戦後にソ連が持ち込んだ家具等を展示されていたのだが、古代史の展示室は、元々の千島列島(クリル諸島)にはアイヌ民族が居住していたことやその歴史、狩猟文化、ヒグマの毛皮などを展示していた。日本人の生活についても、近代史の展示室ではなく、「古代史」の展示室に配置されていた。「日本」の島であったという記述はない。オランダ人マルチン・ド・フリースが最初に千島列島を発見したとあった。



博物館近くの図書館。
左の建物が、現在の図書館。右奥の建物が建設中の新しい図書館。9月には完成予定だという。この図書館の利用者は、年間のべ1600人。そのうち、4分の1が14歳以下の子供たちであるという。(国後島の人口約7000人弱なので約23%)



日本海のは、どう記されているのか。此の地球儀はに、ロシア：Японское море (ヤポンスコエモーリエ、ローマ字転記：Japónskoje mór'e)。ロシア語で「日本海」の意味である。ちなみに、韓国は、外交戦略的に東海と呼んでいる。ロシアの地球儀で、しっかり根室海峡にラインが引かれていた。他の国のはどうなのだろうか。世界各国の地球儀、地図をチェックし、北方四島の所属を日本の領土であるとし、しっかり明記させる努力を強力に推し進めることが大切ではないか。ここでも世界中の人々に、北方四島は日本固有の領土であることをアピールする必要がある。



源氏物語。なぜか表紙には、浮世絵が描いてある。

日本の文学作品はどれも、表紙と書かれている内容の歴史の年代は一致しなかった。竹取物語の小説にも、浮世絵が描いてあった。

消防署(仮庁舎)



仮設の消防署の庁舎。建物の色は、全く関係ないとのこと。お世辞にも立派と言えない。

ズナチャフスキー消防隊長の話では、休暇中なので7名のうち4名で勤務のこと。年間60日(土日を含む)の休みがある。

昨年1年間に8回火事があったという。救急車は病院配属になっているので、消防署から要請する。

消防署から各会社に自主消防組織を作るように要請しているが、なかなか実現しないとのことであった。



ロシア製の消防車。ずいぶん車体が大きく迫力があるが・・・。

大きい消防車の割には、ホースからでる水は10mも届かない。私の住む町内にある私設消防団のポンプに比べても威力が貧弱そのもの。高いビルがないのでじゅうぶんなのか。



建設中だったこの新庁舎と、4台の消防車と全職員49名で8月2日より、稼働したという。消防署の呼び出しは、日本と同様呼び出し番号がある。ここでは、電話で01 112番であるという。津波警報が出たら、消防車が出動し、マイクで住民に知らせる。東日本大震災の後、サハリンから津波調査団がきて、マイク等の通信設備を調査していった。



家の外観は、バラック立てのような、粗末な家に見えるが、中に入ると、日本製の電化製品、家具、調理器具などが、そりい豊かな生活を連想した。テーブルには、奥さんの手調理がズラリ。左、奥さんのネラドフスカヤ（36歳銀行勤務）さん、左から2番目奥さんの父親（およそ60歳元船長）。右上写真は主人ウラジミル（57歳漁船の船長）、娘ダーシャ（5歳）。恥ずかしがり屋の息子ダニール（7歳）。左下写真、経済的に豊かな家庭で、主人のウラジミルさんは、11月から5月は、遠洋漁業に従事し、6月から

10月は下船し、家にいるという。中央アジア出身で、モンゴルの血混じっているという。休みは、日曜大工をよくするとい。サウナの部屋（写真）も自作したという。英語も話せる方で、片言のロシア語と日本語と身振り手振りで通じ合う。日本酒（根室の酒「北の勝」）ばかり、飲んでいた。奥さんは手料理が上手らしく、調理用品や調味料なども日本製を使っている。父親は、自家製のウォッカを何かにつけて、乾杯の連発。恥ずかしがり屋の息子と愛らしく活発な娘は、日本からのお土産にとても喜んでた。日本人には非常に友好的であり、親日家であったが、領土問題については全く触れず、政府レベルの交渉と割りきっているようにも思えた。奥さんは子どもの将来を考えて、サントペテルブルクに移住したいと語っていた。島の物価はサハリンより高く（品物によっては大陸の2倍）、地方公務員の給与も大陸よりも高いため、定年後の年金暮らしはロシア大陸に移住する人も多いと聞く。そういえば、島では老人は、余り見なかった。

7月31日(日) くもり

3日目

国後島

視察・訪問(气象台、港、取水施設、空港、日本人墓地等)、教育関係者、意見交換会、夕食交流会、住民との交流会〔友好の家泊〕



国後の气象台。

1940年設立。ロシア国内のものを含めてもではもっとも古いという。建物の上のレーダーは、現在使用していない。



昔、懐かしい百葉箱で気温を観測する。なぜか、地上1.5mでなく2.5m。

ここでは、土壌の温度、気温、降水量、太陽の南中高度を測定する。装置は旧式ばかりは、数十年前にタイムスリップした感覚を覚えた。



気象観測士の話では、観測データのみサハリンの気象台に送るといふ。国後島の天気予報は、日本の天気予報を利用すること。その方が正確であるからだそう。機器は日本製のものが多い。



改修中の古釜布港

2008年より、埠頭の改修が行われている。大型船が入り出すように水深をより深くするという。総工費9億5000万ルーブルである。

2008年から、クリル経済発展計画に基づき港湾を整備中。深さ4m幅200m超の部分から、深さ7m・幅97mの部分、深さ7~11m・幅147mの部分まで整備するよていという。深いところであれば、今回乗船したロサルゴサ級の船舶であれば十分停泊できるとのこと、実際に、サハリンとの定期船が就航しているようである。



放置されている船の残骸

港を改修中というが、湾内にある座礁した船は放置されたまま。船は傷みがひどく、ゴミとなっている。



建設中の取水場施設の途中の風景。羅臼山をのぞむ。
道路の拡張工事中。建設機械は、ヒュンダイとロゴの入った韓国製であった。



クリル発展計画に基づき、古釜布の上下水道事業が着手されている。これは、オペレーター用の建物。
新たに8つの目の井戸を完成させて、1日あたり2500立方メートルの水を街へ供給することになるという。地下70m～90mを掘っている。2014年まで完成するという。



完成間近の新しいメンデレエフ空港。羅臼山のふもとにある。建設費3億ルーブル。建設担当は、地元の建設会社トルードサハリン社。1階が旅客ターミナル、左の部分はオフィスと国境警備隊の事務所になる。滑走路2300m。ロシア製旅客機(40人乗り)が週5便がサハリンと行き来している。現在、サハリンのユジノサハリンスクとの間で週に5便があるものの、観光客は主に船で来るほか、北方四島周辺はロシア本土13からの渡航が制限されているため、空港利用者はほとんどが地元の人とのことである。年間12000人が利用。将来は、ウラジオストクやハバロフスクとの航路を開き、年間33000人の利用を見込む。



東佛墓地近くの風景

東佛墓地。
道路から海岸沿いに、日本人が住んでいたと思える家跡が見える。墓地は古釜布から羅臼山をはさんで西南側にある。海岸を見渡せるちょっと小高い丘に所在。少々奥まった自然保護区の中にあつて、海岸線から徒歩で10分もかからない。



東佛墓地。海岸の近くの小高い丘のうえにある。15以上の墓が残っていた。
ロシア人のボランティアにて草刈りなどの管理がなされている。周囲が草ぼうぼうの中、クリル交流センターが通路を含めて日本人のために整備してくれているとのこと。草刈りがしてあつた。墓石のない墓もあつた。墓石が建築資材として使われたらしい。墓の周りには白い貝殻で周りを囲ったりしてあつた。



行政府ホールにて「教育」に関する教育関係者・住民交流会

行政府ホールにて「教育」に関する教育関係者交流会
ロシア側は4名ほど出席。
3つのグループに別れ、事前に出された教育書問題について、意見が交わされた。ロシア側からは、夏休み中ということで、教師も休暇を取っていて出席者は少なく、私たちのグループにはナリウダ・マクシモア副校長が対応した。彼女は小学校担当で、教育心理が専門であるとのこと。



子どもたちは、民族音楽に合わせて、とても上手にダンスを演じていました。
右下は、同行一人の日本の中学生の空手。



商店見物。
外からは商店であると気づかない。出入り口は、1カ所しかないところが多い。砂埃対策か。
食料品は、豊富にそろっている様である。ここでは、飲料水、缶詰、アルコール、肉類、果物、乳製品、魚、惣菜などが売られていた。日本のコンビニという感じ。店員は無愛想で、レジを打ち、品物を渡す。
野菜は、ダーチャと呼ばれる家庭菜園で調達するようであり、店頭にはなかった。



商店の裏から択捉島南端のベルタルベ山(1221m)?をのぞめた。



一行の懇親会兼夕食会。久しぶりにメニューも豊富。



夕食後行政府ホールにて「イワン・クパーラ民族・芸能祭」でダンスと娯楽イベント。



ディスコ。華麗に踊る参加者。

8月1日(月) くもり

4日目

国後島 → 根室



2隊に分かれて、友好丸でロサルゴサ号へ。まず、最初の1団出発。



ロサルゴサ号に乗り換え根室へ



船旅の途中、イルカの群れが約1時間にわたって時々顔をのぞかせてくれた。



根室湾内に入る、琴平岸壁が向こう岸に見える。
根室到着である。日本時間午後1時40分。



北方四島の早期返還を願って。また。
現代は、日本の国境問題 北方領土、そして尖閣・竹島・問題など日本の主権に係わる問題として、世論を高め、国民は一致して国土を守る意識を高め、正当な権利を履行していくことが強く求められている時代であると思う。